中國文學報　第四十九册

「哀江南賦」論

——鋪陳に於ける時間——

原田直枝
京都大學

序

時間という，目にも見えず至って抽象的なもの，言葉はそれをどのように表現し得るのか。この「時間」と文學作品との關わり方には二通りの場合がある。一つは，作品の主題としての時間，敍述の內容としての時間であり，もう一つは敍述の裝置としての時間，作品の中で具體的に機能する時間である。前者の場合は，例えば詠嘆の對象であったり，抽象的考察の主題であったりして，しばしば私たちはそこに所謂る時間意識のようなものを窺ったりすることになる。一方，後者の場合は，時間的座標が作品のモティーフと如何に關わり合って作品全體にどう働いているかに於て最大の關心が拂われる。時間的座標に從った敍述という點で歷史記述との比較考察の材料とされるのもこの後者の場合で，例えば，近代以降，歐米の小說をめぐる時間論などはそのよい例であり，またその小說との對比から「絕對的過去」と言われる時間座標を持つ古典の英雄敍事詩などもその一つである。文學と時間，いや言葉による時間の表現というものを考える上で，こうした後者的な作品の研究が有效であることは確實なのではないか。ところで，よく知られる通り中國の士大夫文學に於ては所謂る敍事詩的な性格のものは育たなかった。自ずと情況は歐米と異なる。しかしながら，歷史記述と見紛うばかりに時間的座標に從った敍述でしかも「文」「史」のうちでは「文」と見做されるような作品は少なくない。さらにまた，紛れもない「文」の中にも一篇一篇見ていけば，單に詠嘆の對象や高度な思辯のテーマではなくして敍述の中の裝置として時間が機能するものが見出される。そこに於て，敍述の主題や內容がその時間軸に載せられることによって如何なる展開を繰り廣げることになるのか。本論で採り上げる庾信「哀江南賦」

は，まさにそういう視點で考察してみるべき一篇である。

一

「哀江南賦」の作者庾信についてはここに改めて詳述するまでもないであろう。[1]『玉臺新詠』の編者徐陵と併せて「徐庾」と稱される如く，南朝梁の下では艶麗な宮體詩の作家として名を馳せ，やがて梁武帝太清二年（五四八、戊辰）侯景の亂に發端する梁朝滅亡と，彼自身及び梁朝遺民の北地への强制的な移動を歴て後，北周に於て過ごしたその人生後期には前期と全く作風を異にして，梁朝滅亡に伴う羈旅漂泊の悲哀，所謂「鄉關之思」（張溥「庾開府集題辭」）を主情とする佳篇を多くのこすこと，周知の通りである。[2]

庾信平生最蕭瑟　庾信 平生 最も蕭瑟
暮年詩賦動江關　暮年 詩賦 江關を動かす
（「詠懷古迹五首」一）

その後半生の詩文及び境涯にまつわるイメージを右のように集約して捉えたのは，杜甫であった。この庾信の遭遇した時期が歴史區分の上で南北朝から隋唐への時代の轉換點に當ることは言うまでもないが，彼の文學もまた上述のように既に十分に相違が認められているその人生前期・後期それぞれの作風のいずれもひっくるめた總體として，文學史の上で六朝文學最後の大成を示す存在[3]と見て差し支えない。

さて，その北遷後，國家破亡の體驗を反映した作品多數の中でも「哀江南賦」はとりわけ歴代の注目を浴びてきた。それには一見して明らかなところでは，例えばこの賦が四言・六言句を基調とする本文五二八句，序文一三六句より成る長大なものであることをはじめ，上にざっとなぞったような庾信の半生とその背景となる時代の出來事に直截に言及して，時には自傳的性格を指摘されるようなスタイルを呈すること，或いはその篇名「哀江南」が『楚辭』「招魂」で度々繰り返される祈りの言葉「魂兮歸來，哀江南」を踏まえたものである上に，同じ『楚辭』の一篇「哀郢」をも想起させて，『楚辭』の悲壯慷慨に滿ちた抒情性の繼承を直ちに予想させること等，人々の興味を喚起せずにはおかないような諸點を持つことも大いに與かるであろう。

こうした各側面について「哀江南賦」へのアプローチは既に數多くなされてきている。[4] 特にその濃厚な自傳的傾向については，同時期の顏之推「觀我生賦」とともに，中國文學に於ける「自傳」の在り方を考察する上で，興味深い特長であるに違いない。しかし今，「哀江南賦」一篇を以て敢えてその輪郭を一言するならば，やはり〃亡國の歌〃ということになるだろう。すなわち，庾信自身の半生にまつわるエピソードは，確かにそれ自體重要な主題であるが，一方，篇中隨處で語られる庾信以外の多數の同國人たちの挿話群とともに〃亡國〃という事象の一面を表す構成要素ともなっていることに注目する立場から，本論はこの賦をまず〃亡國〃という大主題をうたう歌として捉え，それを檢證してみるものである。これは決して無暗な予測などではなく，次のように「哀江南賦」序文によって明確に察することができる。

六朝文學史の中ではそれ自體が駢儷體で書かれた文としても注目される「哀江南賦」序文[5]は，本文に對してちょうど示意圖のような役割を果たしその梗概を知るのに便利である。當時の詩賦に冠せられた序文の中では珍しいほどに大部かつ詳細なものだが，そこで示されている內容は相當簡潔に絞ることができる。すなわち，冒頭，

粤以戊辰之年，建亥之月，大盜移國，金陵瓦解。余乃竄身荒谷，公私塗炭。華陽奔命，有去無歸。中興道銷，窮於甲戌。

粤戊辰の年，建亥の月を以って，大盜 國を移し，金陵 瓦解す。余身を荒谷に竄し，公私塗炭す。華陽に奔命するに，去ること有るも歸ること無し。中興 道銷え，甲戌に窮まる。

この四言十句のうちに「哀江南賦」本文で辿られる事柄は集約されている，と言ってもよい。要するに「亡國」の顚末である。以下，亡國にまつわる庾信の所感，苦痛悲哀の心情が古人故事になぞらえて披歷されるが，その核が端的に述べられているのは次の一節。

危苦の辭 無くんばあらず，惟だ悲哀を以って主と爲す（不無危苦之辭，惟以悲哀爲主）

これは亡國にまつわる庾信の所感であると同時に，この敍述に際しての情感でもあるらしく，ともかく「哀江南賦」に於て「悲哀」という情感が核となることの據りどころとしてこの一節は有力である。もう一つ「悲哀」という語を直接掲げている部分。

嗚呼，山嶽崩頽，既履危亡之運，春秋迭代，必有去故之悲。天意人事，可以悽愴傷心者矣。

嗚呼，山嶽崩頽して，既に危亡の運を履み，春秋迭いに代われば，必ず故を去る悲しみ有り。天意も人事も，以って悽愴として心を傷るべき者なり。

この「悲哀」の情が，單に亡國を體驗した個人の運命に對して催されるばかりでなく，國家破亡・北遷という環境喪失の事態にもまつわるものであることを，この一節を含む序文は予告している。そして實際本文を一讀すれば，そこでは梁朝どころか晉室の東遷時に溯って江南政權の興隆から事實上の江南政權崩壞とも言える梁朝滅亡までの，江南政權と庾氏一統の轉落の迹をひたすら辿る內容が確かめられるのである。

このように「哀江南賦」は，「亡國」の事態をめぐって時代や社會及び個人の「悲哀」が述べられた歌，という輪郭で捉えることができる。この輪郭は實に分かりやすい。何しろ亡國の混亂とそれに伴う悲哀，という內容は『詩經』『楚辭』の昔から詩文の背景として，また主題として，比較的馴染み深いものであるから。⑥

では，この馴染み深い「亡國の悲哀」が實際「哀江南賦」では如何に表れているのか。詳細な論證は後に回すこととして，結論から先に言おう。

これまであまり重視されていなかったようだが，亡國の悲哀という文學の主題として普遍的な內容をもちながらも，「哀江南賦」はこれを文學史の上で何がしかの系譜に歸屬させようとするとピタリと當てはまる先が意外にも斷定しにくい。けれどもそれはこの賦が文學史の上で孤絕していることを表すのではなくて，先ほど幾つか例を擧げた通り，むしろ六朝期詩文の間に多樣に通じる要素がそこに集合しているためのことである。但し，その採り入れた諸要素には從前のそれに對する變換が見出され，それが實に興味深

い。その第一は，亡國の悲哀にまつわるモティーフについて，その敍述の座標を當時一般的だった空間の中でのそれから過程すなわち時間に從ってのそれへと變換させて述べていること。第二は，そのような敍述の結果，そこに所謂推移の悲哀[7]に代表される，悲觀的な思念の對象としての時間，題材としての時間ではなく，具體的に敍述の中で機能しつつ存在する時間，言わば「悲哀の時間」の表現が實現していること。概ねこの二點に絞ることができる。どちらについても，まずこの作品が時間の進行に從った敍述であることが大きく關わっているらしい。以下に，「哀江南賦」のこうした傾向を確かめつつ，それが文學史の上でどのような展開として位置づけ得るかを考えていきたい。

二

本章ではまず，この「哀江南賦」に假に亡國の記錄と言っても過言ではないほどの敍事的な側面を與えている，丹念に時間を追って梁朝滅亡の過程を述べる構造について檢討してみたい。全體を一度に見渡すために，今便宜上敍述の內容によって本文を段落に區切ってみると，凡そ六段に分かつことができる。[8] 各部分の要點と句數は，左の通り。

一；庾氏の系譜と庾信自身の青年期の經歷。　◎　六〇句

二；武帝の盛時から戊辰（五四八）侯景反亂を經て建康陷落まで。　一七二句

三；建康から江陵へ長江溯上の避難の行程。　◎　五六句

四；梁元帝の中興から申戌（五五四）江陵陷落まで。　一三二句

五；江南遺臣の長安への移動中途の艱難辛苦。　◎　五二句

六；一聯の過程に對する所感。　◎　五六句

一見してわかる通り，初めから結びまでずっと事態の經緯を追う形，つまりこの賦の內容が時間の進行に從って配される形になっている。やはり，この長大な賦を通底する軸として「時間」の機能は無視し難い。ここでその「時」とは，庾信「哀江南賦」執筆の北周の時點から見て既に滅ん

だ王朝を流れていた時間，言い換えれば既に一つの完結をみた時間，所謂「絶對的過去」であり客觀可能な對象でさえある。それが座標軸となって，梁朝と庾信それぞれの得意の時期たる第一段落の「盛」を頂點としてより以下，第二～四段落と段落を追っての梁朝及び庾信の落魄衰滅の過程を經て，亡國後第五段落の「滅亡」の究極まで，述べられる事柄の性質は隆盛から衰亡へと下降傾斜の方向をひたすら辿る，という體裁になっている。

また，右で◎印を付したのは，庾信個人に關する內容の敍述が或る程度まとまって認められる段落。そこで各段それぞれの敍述の內容と句數の關係に目を向ければ，著しく句數の多い二・四段めは滅亡の軌跡を專らに述べるものであるのに對して，比較的小規模な三・五段で，庾信身邊の私的な敍述に織り混ぜるような形でそれを取り卷く江南社會の情況の描寫に相當筆が費やされている。もとより句數の多寡を萬能の目安と考えるわけではないが，歷史的な時間軸に從った篇中，庾信を取り卷く時代や社會に關わる敍述が占める割合の大きさというこの事實もまた，亡國の記錄的側面を持つ「哀江南賦」を支える要素の一つとして全體の中で考えてみる必要があるだろう。

こうして「哀江南賦」の輪郭を支える骨格は，亡國という事象について時間軸に從って時代や社會を述べる形式として捉えられるのだが，このように一代を通して辿る敍述の形と言えば，やはり「史」の敍述，殊に年代を追って出來事を述べる編年體のそれが思い浮かぶ。

因みに，梁朝に關する編年體史書の一つ，何之元『梁典』[9]の序に於て何之元自ら『梁典』の構成について說明するくだりを參照してみよう。何氏は，庾信と同じく梁朝の滅亡を體驗して後，陳に仕えた人物（『陳書』文學傳）。そこでは梁朝內部の情勢の變化によって「六意」すなわち六段に分けて，順に「追求」→「太平」→「敍亂」→「世祖」→「敬帝」→「後嗣主」と題している。[10] この時間の流れに對する節目の捉え方，そして全體を通して興隆から衰弱への下降の展開とする括り方は，「哀江南賦」の時代や社會の相の要點を順に述べていく次第と符合するものである。王朝一代の興亡を時間軸に從って述べるというのは，「盛衰を表徵し，興

廢を殷鑒」し，「一代を彌綸」することが任務と見做される（『文心雕龍』史傳）歴史記述としてはむしろ當然な敍述の結構であろう。それに「哀江南賦」の敍述の軸が符合するのは，この賦が梁朝興亡の記錄のような側面を持つ理由を，單にその表す內容（所謂「今事」）[11]にばかりでなく，その內容を載せる敍述の軸そのものにも求めるべきであることを示唆するものではないか。

ところで，このように編年體史書の記述に準ずるような，直截に歴史的時間に伴う事象を取り上げ述べるという結構に於て，庾信に先立つ魏晉南北朝期の範圍で，「哀江南賦」と非常に近似する作品が，幾つか見當る。賈誼「過秦論」をはじめとして陸機「辨亡論」干寶「晉紀總論」等，一王朝の興隆と滅亡を主題と定めて論じた文が，それである。一見して明らかなように，いずれも五言詩や辭賦といったジャンルではなく，歴史記述「史」により近いところに位置するものであり，それぞれ特定の王朝の興亡の顚末を論じる形式に於て共通する。假に〃興亡史論〃と總稱するとしよう。

これらは，一王朝の興亡の過程を，節目節目を押さえつつ下降の時間軸に沿って一涉り語る骨格に於て共通し，その結果歴史記述と比べても引けをとらないほどに一代の歴史的流れの要所を押さえておりながらなお，究境，歴史的內容を題材として加工した〃文〃として認識されるものである點でも相似る。何れも「沈思翰藻」[12]を旨とする詞華集『文選』の採錄對象となっていること（それぞれ卷五三「論」・卷四九「史論」所收）が，これを裏づける根據の一つと言ってよい。一方，この一群の中で，その論じる對象の王朝の別以外に個々の性格を異ならせているのは，各王朝に對する各作者の立場の相違であり，それは，各篇中での作者自身の表れ方——言わば〃自敍性〃[13]——の濃さに直結する。つまり，亡朝の遺臣であるか否か，また亡朝を辯護する氣持ちがあるのかそれとも現王朝のために冷徹に亡朝の興亡を分析するのか，といった立場に個々違いがあり，それによって各作品の〃自敍性〃の度合いが異なるのである。例えば賈誼なら後者の立場で「過秦論」に〃自敍性〃は希薄，干寶も史家として後者に當る。反對に前者の立場で〃自敍

性〃も濃いのが，陸機「辨亡論」で，〃興亡史論〃通有の形式プラス〃自敍性〃の兼備という點で「哀江南賦」と共通する要素を最も多く備えた作品と言え，それだけに對比してみる意義も大きい。ここで些か「辨亡論」を參照してみたい。

庾信或いは「哀江南賦」との類似，暗合という見方からすると，陸機「辨亡論」は實際その例に事缺かない。三國吳の名門出身でありかつその遺臣として勝朝の晉に生き長らえた陸機が著したという經緯がそもそも，庾信「哀江南賦」のそれと酷似している。無論庾信がそのことを十分意識し我が身を陸機に擬らえていたことは，「哀江南賦」に於て「陸機之辭賦，先陳世德」「逢赴洛之陸機，見離家之王粲」等，陸機が亡國の悲痛に本づいて著した他の詩賦に言及する句が見えることからも察せられる。極端な話「哀江南賦」と「辨亡論」とをめぐる背景の大きな相違は，それを著した作者が，一方の庾氏が晩年に於て著し，一方の陸氏はその青年期に於て著した，ということくらいかも知れない。また內容に關しても「辨亡論」は夙に，客觀的に亡國過程を分析する歷史論や政治論などではなく，亡吳にまつわる悲痛，陸機自身の祖先一統に對する顯彰と哀惜の念に支えられた作品であるということでほぼ共通の認識を得てきている。[14] この論に對する後世の理解もまた「哀江南賦」のそれと甚だ似ている。何れも「故鄕喪失者のうた」「國家破亡の悲哀」「羈旅詩人」等のイメージによって記憶される作品であること，周知の通りである。[15]

さて『晉書』卷五五本傳では論執筆の事情を次のように記す。

年二十にして吳滅ぶ，孫氏は吳に在り，而うして祖父は世よ將相と爲り，江表に大勳有るを以て，孫晧の擧げて之を棄てしを深く慨き，乃ち（孫）權の得し所以と，（孫）晧の亡いし所以とを論ず。又た其の祖父の功業を述べんと欲し，遂に辯亡論二篇を作る（年二十而吳滅，以孫氏在吳，而祖父世爲將相，有大勳於江表，深慨孫晧擧而棄之，乃論權所以得，晧所以亡，又欲述其祖父功業，遂作辯亡論二篇）

すなわちこの論は國家興亡に關わる事柄(公)と陸氏一族の盛衰に關わる事柄(私)との二つの內容を述べる，というわけである。それは具體的には，漢末の混亂の情勢から三國鼎立，就中吳の內部情勢，その滅亡までの「所以」すなわち過程に織り混ぜて，それぞれの局面に伴う陸氏一統の活躍を語る形をとっている。例えば「辨亡論」上篇の場合，「昔漢氏失御」と後漢の衰退期から始まり，「吳武烈皇帝」孫堅の興起，「長沙桓王」孫策，「大皇帝」孫權に極まる隆盛，「大皇既沒」以降の孫皓に至る滅亡の經緯，といったように吳一代の盛衰を辿る軸がまず認められ，そして各所ではその段階を象徵するような事柄や人物が提示されていく，というように。「論」という體裁ゆえもちろん「嗚乎，哀哉」とか「悲矣」といった亡國に對する直截な悲哀の感情の表現こそ挾まれていないものの，「辨亡論」はこのように言わば公私二つの旋律を疊み込み，その兩面から織りなす〃興亡歌〃の樣相を呈している。こうした二つの旋律が協和し合って「悲哀」を奏でる構造は，本章冒頭での要約一覽の如くまた以下本論で論ずる如く「哀江南賦」のうちにもやはり見いだせる。「哀江南賦」「辨亡論」の相似は，單に庾信・陸機二人の亡國體驗・遺臣という境遇や立場に絡む作品の成立事情の共通ばかりでなく，作品の具體的な構造の共通としても認められるのである。もはや偶然と言うよりは，積極的に〃興亡歌〃の系譜の存在を想定してよいのではないか。

ここで，改めて「辨亡論」の語りの構造という一點に注目してみよう。一見「分裂した二つの要素」[16]に見える國家興亡に關わる事柄(公)と陸氏一族の盛衰に關わる事柄(私)とは，實はまるきり「分裂」し平行し合う要素なのではなく，ともに同一の時間軸上で展開した事象という點でピタリ重なり合うもので，篇中，この二要素はその時間軸に從って互いに織り合って一つの語りの形を成している。すなわち「辨亡論」を支える語りの軸がこの時間軸であることは紛れもない。

今少し，時間軸に從って語り述べる，という〃興亡史論〃通有の語りの形式について考えてみたい。この語りの形式は，溯って賈誼「過秦論」に於ても既に見られる。否そこ

で固まったと言ってよいかも知れない。ともかく，論じる對象である秦朝について「秦孝公據崤函之固」と戰國初，秦の諸侯時代から說き起こし，時勢に乘っての隆昇の過程から「及至秦王」始皇帝の絕頂期，以下「山東豪俊遂並起而亡秦族矣」の滅亡までを追い，そこにその興亡に對する賈誼自身の見解が付される，という形をとる。「辨亡論」にしろ「過秦論」にしろ何れも，過程を辿る構造は言わばそれぞれ對象とする王朝の興亡の經緯を論ずるという主旨の下，そのために必要な個々の事柄を採り擧げ，作者の論旨に適うよう再構成する際に，その再構成の軸として敷かれたものである。[17] このように時間軸に從っての敍述を作者の主旨を展開するための場とする構造は，無論やがて「哀江南賦」に相通じるものである。ここに一つの語りの系譜を辿ることができないだろうか。

これについて錢鍾書『管錐編』の「賈誼過秦論」條（第三册八八八頁）に興味深い記載が見える。

按ずるに，項安世の項氏家說卷八に，賈誼の過秦，陸機の辨亡は，皆賦體なり，と。洵に曲を識り眞を聽くの言なり（按項安世項氏家說卷八，賈誼之過秦，陸機之辨亡，皆賦體也。洵識曲聽眞之言也）

この條，錢氏の論は賦だの記だのと文體意識に縛られて文そのものを見損なうことの愚を問題とし，その枕として項氏の說とそれへの同意が示されているわけである。言うまでもなく「賦體」の基本は〝鋪陳〟[18]である。錢氏のこの發言は，「過秦論」「辨亡論」に於ける，時間座標に沿った興亡の經緯の敍述の型に〝鋪陳〟性の一端を認めたればこそなされたと考えられる。第四章で詳しく述べる通り，文學史及び文學批評史を通じて歷史的時間の座標に沿った敍述の〝鋪陳〟性に目を向ける積極的な意見が，空間の〝鋪陳〟への注目に比べて少ない中で，これは貴重な發言である。錢氏がこの條でいみじくも提起する如く，硬直した文體意識を取り拂えば，陸機「辨亡論」をはじめとする〝興亡史論〟と「哀江南賦」との間に見出された，時間座標に沿って事象を述べる構造の類似には，時間座標に沿って事象を述べ列ねていく〝鋪陳〟の類型として文學史上かなり重要

な意義が見出される。これはまさに「文史の時代」[19]である六朝を通じて存在するにふさわしく，「文」の洗練と歴史記述の方法の確立の雙方の動向に密着した〃鋪陳〃の型ではないか。

以上，「哀江南賦」が江南興亡にまつわる時間軸によって展開していく構造をめぐって主としてその系譜に卽して考察を試みてきた。今度は，章を改めてこの軸に沿って述べられる本文の內容の具體的な傾向を見てみたいと思う。

本章初め既に觸れた通り，本文に於て，亡國の過程を辿る敍述と庾信の個人的話柄は，交互に入れ替わるように表れる。ちょうどそれは，饒宗頤氏が顏之推「觀我生賦」と比較して「哀江南賦」の敍述について「(哀江南賦は) 既に時代を以て經と爲し，復た身世を以て緯と爲す」(「讀庾信哀江南賦」[20]) と簡潔に言われた，その構圖に當るであろう。確かに賦の全體像はその通り，時代(環境)と庾信個人の兩面に亙って梁朝興亡の過程に起きた事柄を述べていくものである。そのことを念頭に置きつつ，今本論では，第二〜四段落中の時代や社會の出來事を主とした敍述部分を重點的に檢討するつもりである。何しろ，この部分は，この賦の二大要素——時代・社會と個人——相互の關わりに於て「悲哀」を表す，時間軸に沿った過程描寫の主要部に當るから。そして先回りして言えば，ここに，悲哀の心境告白にではなく，盛から衰へと順に配された各節の事象と事象の連續や對比によって「亡國の過程」に伴う下降の悲哀に在る，この賦の敍述の重點が，端的に窺われるのである。

三

「哀江南賦」の敍述は「用古典以述今事」(陳寅恪「讀哀江南賦」[21]) とも言われるように，具體的には夥しい典故によって支えられている。その典故の大半を，個人の「悲哀」に通じるもの及びそうした個々人の「悲哀」の背景となるような國家や社會の出來事を示すものが占め，それがこれまで見てきたような「哀江南賦」の輪郭を支えているわけである。また「今事」とは，『南史』『梁書』『周書』等の記錄と合致するような梁朝に關する具體的な事柄を指すが，

實際のところ「古典」と「今事」との關係を正確に跡づけることは非常に困難で，今日の倪璠の注釋に賴らざるを得ない。[22] 無論その倪璠の考證とて完全無缺なものとは言えず，大いに檢討の餘地をのこすこと，周知の通りである。但し，本論は文學史上「哀江南賦」の敍述としての價値は，そういった一つ一つの「今事」の推定の如何なるかに動かされぬところに存すると確信し，それを解明することを專らにするものであるので，「今事」の推定については概ね倪注の考證に據ることにした。むしろ重視したいのは「古典」のほうであり，それが作り上げる〃亡國〃のイメージである。

「哀江南賦」に於て「今事」を表すのに用いられる「古典」とは，當然と言えば當然のことながら，春秋戰國，秦漢の際，兩漢の際，漢末魏初，吳末，西晉等，梁以前の史上でも際立って凄慘な國家崩壞や政權をめぐる抗爭が展開した局面を表すことによって知られたものが壓倒的に多い。その「古典」自體が齎す〃亡國〃のイメージと「今事」が二層三層に重複して，梁朝亡國の過程にまつわる〃悲哀〃の敍述となっている。それを以下に點檢してみよう。

三—(一)

梁武帝一代の間の興廢を辿る第二段落は，まずその盛時について述べる五二句から始まる。武帝時代の梁朝の繁盛ぶりを形容する言葉として後世よく引用されることになる「五十年中，江表無事」という句も，この一節に含まれる。

この盛時の敍述は，無論梁朝盛時を懷かしむメモリアルとか，或いは以下に展開する滅亡の敍述に先立って置かれることによる明暗の對比的效果とかの意義を持つだろう。

しかし，そういう定石通りの意義づけから一歩踏み込んで，いまこれを盛から衰へ向かう「哀江南賦」全體の軸上で眺めてみれば，一見ありきたりな「盛」を示す言葉が併せ持ち得る亡國の「悲哀」の要素をここは分擔している，とも言える。すなわち，示す內容が究極の「盛」であればあるほど，それは同時に亡國一歩手前の爛熟に通じ，やがて出現する亡國の〃悲哀〃を逆說的に暗示するものとして働く。そのような「盛」を表す言葉に對して既に共有され

たイメージの層のようなものが，ここには窺われるのである。

例えば，その冒頭。

　於時朝野歡娛，池臺鐘鼓。里爲冠蓋，門成鄒魯。連茂苑於海陵，跨橫塘於江浦。東門則鞭石成橋，南極則鑄銅爲柱。橘則園植萬株，竹則家封千戶。西賫浮玉，南琛沒羽，吳歈越吟，荊艷楚舞。草木之遇陽春，魚龍之逢風雨。五十年中，江表無事。

　時に朝野歡娛し，池臺に鐘鼓あり。里は冠蓋と爲り，門は鄒魯を成す。茂苑を海陵に連ね，橫塘を江浦に跨く。東門は則ち石に鞭うちて橋と成し，南極は則ち銅を鑄て柱と爲す。橘は則ち園ごとに萬株を植え，竹は則ち家ごとに千戶に封ず。西の賫（おくりもの）は浮玉，南の琛（たから）は沒羽，吳の歈（うた）越の吟（うた），荊の艷（しらべ）楚の舞（まい）。草木の陽春に遇い，魚龍の風に逢うがごとし。五十年中，江表は事無し。

ここで用いられている詞句の用例を從來の詩文の中に辿れば，例えば「京殿苑獵」賦系で京都の繁華や帝王の盛大な行事の場面，しかもその繁榮充實の極限でそれを歌うために用いられ，以後詩史に定着を見た類のものが多い。

一句め「朝野歡娛」について。倪注が引く張協「詠史詩」の句「昔在西京時，朝野多歡娛」（『文選』卷二一）がそうであるように，文字通りには太平を極めた世の中を表すこの語は，場合によっては繁榮の極致と背中合わせの，凋落の開始一歩手前，飽和爛熟の世をも含意する。班固「東都賦」でこの語の現れる段階などは興味深い。すなわち，東都洛陽の安泰を述べ盡くしたその後に「是に於て聖上萬方の歡娛し，又膏澤に沐浴するを覩，其の侈心の將に萌して東作に怠らんとするを懼る（於是聖上覩萬方之歡娛，又沐浴於膏澤，懼其侈心之將萌而怠於東作）」とある。そこで直接に形容する情況は確かに太平は太平だが，その情況を戒めるべき段階と認める言葉として發せられているわけである。

「池臺鐘鼓」も同樣で，「宮館臺榭，沼池苑囿」（揚雄「羽獵賦」序）というように帝王の力の充實ぶりを示すものである池臺，その建物の中で奏される鐘鼓，ともに盛時のシンボルではあるが，同時に，上に立つ者の資質如何によっては却って亡國に一番近い情況を端的に示す事象にもなる。それはこの語をさらに溯った『左傳』昭公二十年の記事で，

齊景公に晏子が「有德の君」の治世に對比させて說く「淫君」の世を表すものとして「高臺深池，撞鐘舞女」が擧げられているところから，既に方向づけられていたと言える。また，これらの語が，繁榮の極點を示しつつ，その底にやがて來るべき滅亡のイメージを透かし見せるような二重の意味を持つのは『孟子』梁惠王上「文王以民力爲臺爲沼，而民歡樂之。……古之人與民偕樂，故能樂也。……民欲與之偕亡，雖有臺池鳥獸，豈能獨樂哉」にも辿ることができる。「哀江南賦」のここも當然このような典故を踏まえているであろう。それによって，字句の表面が示す隆盛の安樂の底に〃悲哀〃の予兆を帶びる，という獨特の〃悲哀〃の分擔を果たしている。

その下，梁朝の勢力範圍，物產人材の充實ぶり，外交の活況，風敎の安定等，王朝賛美を旨とする文なら必ず言及される項目が一涉觸れられる。「連茂苑於海陵，跨橫塘於江浦」などは倪注の引く通り，左思「吳都賦」「魏都賦」で陸運，水運の便利さをいう場面での用例を背景にもつものであるし，また「橘」「竹」「吳歈越吟，荊艷楚舞」と何れも江南の空間に密接に結びつく植物や歌舞の名が續けざまに擧げられていく。このどれも南方の豐かさや魅力を表す詞句として定番と言っても差し支えない歷史（キャリア）を持つものばかりを列ねた一節，これが，庾信の江南に對する充實した記憶と思い入れを示すものであることは想像に難くない。

しかし實際には，充實した江南の狀態に觸れながらもそれへの鄕愁や哀惜の心情を直かに訴えるような言葉は見當らない。それは，この後に續く「哀江南賦」の他の部分でも同樣で，例えば侯景によって破壞されていく王朝の過程を述べる場合などでもそれを痛切に傷む心情を顯には挿し挾まない。

本章で擧げる例は，從來どちらかと言えば庾信が自己の經歷を述べるのに付隨する參考部分的存在として輕く觸れられる程度できた嫌いのある部分である。しかし賦の內容の實際はむしろ反對で，「哀江南」という篇名から直ちに予想される，庾信個人の「あの日に返りたい，南に歸りたい」という懸戀の情の訴えは，序文と末段に於てしか見ら

れず，庾信と庾氏に關わる私事に類する內容である首段も含めて本文の主要部分では，庾信個人に關わる內容は，その時自分が何をしていたか，どういう狀況だったか，という事柄に言及する程度の挿入なのである。その分，時代の諸事象として語られる內容がそれぞれに，興亡の過程に伴う〃悲哀〃を擔當しているわけで，ここもそれが窺われる一節である。

三—(二)

次に，滅亡の過程の敍述を見てみよう。言うまでもなく，侯景の決起から金陵陷落，元帝の中興及びその敗亡までを述べるこの部分で注目されるのはやはり，抗爭にまつわるモティーフである。

特に，侯景の決起進攻とその前にガタガタと崩れ去る梁朝側の雙方を描寫する第二段落後半，及び江陵に於ける元帝の中興期のさまを述べる第四段がこれに當る。

一體に戰亂後の荒凉の情景や離散の苦しみを歌う詩文なら例に事缺くことはないが，戰亂の經緯を十分に字句を費やし克明に述べた五言詩或いは辭賦となると，庾信以前の範圍ではなかなかこれと言った作品が見當らない。例えば『楚辭』九歌「國殤」などは，弓取り鎧を着て武士が戰う戰場を歌った作品と言えるかもしれない。

操吳戈兮被犀甲，車錯轂兮短兵接。旌蔽日兮敵若雲，矢交墜兮士爭先。凌余陣兮躐余行，左驂殪兮右刃傷。霾兩輪兮縶四馬，援玉枹兮擊鳴鼓。天時墜兮威靈怒，嚴殺盡兮棄原壄。帶長劍兮挾秦弓，首身離兮心不懲。誠既勇兮又以武，終剛强兮不可凌。身既死兮神以靈，子魂魄兮爲鬼雄。

吳戈を操り犀甲を被る，車轂を錯え短兵接す。旌は日を蔽い敵は雲の若く，矢は交も墜ち士は先を爭う。余が陣を凌ぎ余が行を躐み，左驂は殪れ右も刃傷せらる。兩輪を霾め四馬を縶ぎ，玉枹を援き擊ちて鼓を鳴らす。天時墜ちて威靈怒る，嚴として殺され盡して原壄に棄てらる。長劍を帶び秦弓を挾み，首身離るるも心は懲らず。誠に既に勇にして又以に武なり，終に剛强にして凌ぐべからず。身は既に死するも神は以に靈なり，子が魂

魄鬼雄とならん。

吳戈，犀甲，車轂，短兵，旌，矢，士，玉枹，鳴鼓，長劍，秦弓といった武具が多數配されており，これらによって戰況の展開が表されている。この詩は「國殤」と題され，洪興祖『補注』ではそれを解して「國事に死する者を謂う（謂死於國事者）」ものであると說く通り，詠嘆の焦點に無論戰鬪の結果死んでしまった者，死者の哀悼に違いないが，そのためにまず戰死に至るまでの經緯を事柄の連續によって示していることに注意したい。「嚴殺盡兮棄原壄」「首身離兮心不懲」など，結果として戰の悽慘な側面も表れているものの，ここではそれが主というわけでなく，むしろそれすらも抗爭の展開の一部として他の戰鬪の內容と等しく國事に殉じた者への哀悼のための場を構成している。戰鬪に殉じた者への哀悼の意を，綿々たる哀悼の言葉の多用などでなく，戰鬪そのものの敍述によって表すという形の明らかな一例と言ってよいと思う。

また，庾信以前の五言詩・辭賦の範圍でこのような形で抗爭を表したものは『藝文類聚』『初學記』等類書の「武」部に於てまとまって見られる。それらの中には王粲「從軍詩」のように，この「哀江南賦」にも通じる個人的な征役の感慨に本づいたものもある一方，魏の曹操・曹丕の戰功を讃えてその行軍のさまなどを歌った類の勇ましいもの・公的な要素の强いものも多い。後者の場合は，いきおいその內容は軍容の勇壯さや見事さを述べることに重點が置かれる傾向を持つ。つまり，戰勝の當事者の側から發せられた聲なのであって，自ずと戰そのものを美化した表現が目立ち，抗爭に伴う凄慘な要素は淘汰されてしまっているのである。

とは言え，庾信自身の他の詩文のうちにも，北周期の作として「同盧記室從軍」「侍從徐國公殿下軍行」等，戰の展開に相當字句を費やした五言詩が見える。それらが「奉和○○」「從○○」と題することからもわかる通り，北周の諸侯王の征役を壽ぐ武勳詩のような性質を帶びていることは否めないが，しかし「哀江南賦」のこの抗爭場面での表現や字句と重複するものも少なくないことは參考になるのではないか。

では「哀江南賦」の例を見てみよう。

始則王子召戎，姦臣介冑。既官政而離逷，遂師言而泄漏。望廷尉之逋囚，反淮南之窮寇。出狄泉之蒼鳥，起横江之困獸。地則石鼓鳴山，天則金精動宿。北闕龍吟，東陵麟鬬。爾乃桀黠横扇，馮陵畿甸。

始めは則ち王子戎を召き，姦臣介冑す。既に官政にして離逷し，遂に師言にして泄漏す。廷尉の逋囚せらるるを望み，淮南の窮寇を反す。狄泉の蒼鳥を出だし，横江の困獸を起こす。地は則ち石鼓山に鳴り，天は則ち金精宿を動かす。北闕に龍は吟え，東陵に麟は鬬う。爾うして乃ち横扇を桀黠し，畿甸を馮陵す。……

少々繁雑にわたるが，各句の本づく典故とその表す事柄（今事）とを見てみたい。まず「王子」とは蕭正德を指し，侯景を梁の域内に招き入れ王室内部からの崩壞を生んだ張本人としてその事蹟を西晉の趙王倫になぞらえたのが初二句。そして「師言而泄漏」は春秋時代齊の内部崩壞の張本ともされる『左傳』僖公二年「齊の寺人貂 始めて師を多魚に漏らす（齊寺人貂始漏師于多魚）」の記事に，同じく「官政而離逷」は襄公十四年，范宣子に答えた戎子駒支の言葉「自是以來，晉之百役，與我諸戎相繼于時，以從執政，猶殺志也。豈敢離逷」に本づく。倪璠はこれを，蕭正德が起死回生を狙って鄱陽王に送った密書が侯景に漏れて誅せられた事實（『南史』卷五一）に結びつけて釋している。

「望廷尉逋囚，反淮南之窮寇」の二句もそれぞれ晉の蘇峻が「我は能く山頭に廷尉を望むも，廷尉に山頭を望むこと能わず（我能山頭望廷尉，不能廷尉望山頭）」と言って反亂を起こした（『晉書』卷一〇〇）故事，三國魏で諸葛誕が淮南に據って反亂を起こした故事を踏まえる。但し，元の故事は共に擧兵して平らげられたものであるのを，ここでは逆轉して却って反逆者侯景の勢力復活の事に當てている。次の，侯景その人を喩えた「狄泉之蒼鳥」「横江之困獸」もやはり胡賊の侵入蹂躪に通じる故事を，それぞれ『晉書』隱逸傳・『左傳』定公四年に本づく。これらは，それぞれ上古から近古まで時代の別はあるが何れも國家擾亂の記事中，或る特定の人物の行爲や言動として記されたものを用

いていて，強大化していく侯景のありさまの背後に，そうした歴代の謀叛と擾亂のイメージをだぶって見出すのはそう難しいことではない。一種の二層構造と言ってよいかも知れない。

また，以上列ねた侯景臺頭の事態について，梁朝治下それまでに實際起きた災異の驗としての意味を添える言葉だと倪注釋くところの「地則石鼓鳴山，天則金精動宿。北闕龍吟，東陵麟鬬」は，やはり國家の凶運の預兆として既成のイメージを持つ災異の詞群である。このように，「哀江南賦」の中で最も事態の進行に從った敍述であることの明らかな部分，具體的にそれは，滅亡や擾亂のイメージを帶びた典故・故事の多用によって，歴代の滅亡・擾亂のイメージの層を示しつつその中で梁朝のことを述べていくという構造を支えている。

今一つ例を擧げてみよう。事態進行の敍述に於て亡國への預兆は次のようにしても示される。臺城攻防に當って梁朝のために身を賭して奮戰した諸臣武將を擧げていく部分。

遂乃韓分趙裂，鼓臥旗折。失羣班馬，迷輪亂轍。猛士嬰城，謀臣卷舌。昆陽之戰象走林，常山之陣蛇奔穴。五郡則兄弟相悲，三州則父子離別。護軍慷慨，忠能死節。三世爲將，終於此滅。濟陽忠壯，身參末將。兄弟三人，義聲俱唱。主辱臣死，名存身喪。狄人歸元，三軍悽愴。尙書多算，守備是長。雲梯可拒，地道能防。有齊將之閉塞，無燕師之臥牆。大事去矣，人之云亡。申子奮發，勇氣咆勃。實總元戎，身先士卒。冑落魚門，兵塡馬窟。屢犯通中，頻遭刮骨。功業夭枉，身名埋沒。

遂に乃ち韓のごとく分たれ趙のごとく裂かれ，鼓は臥(たお)れ旗は折らる。羣れを失いたる班馬は，輪(くるま)を迷わせ轍を亂す。猛士は城を嬰(めぐ)らし，謀臣は舌を卷くのみ。昆陽の戰に象 林を走り，常山の陣に蛇 穴に奔る。五郡は則ち兄弟相悲しみ，三州は則ち父子離別す。護軍は慷慨して，忠にして能く節に死す。三世に將爲りて，終(つい)に此に於て滅ぶ。濟陽は忠壯にして，身は末將に參(ま)じわる。兄弟三人，義聲俱(とも)に唱わる。主は辱められ臣は死し，名は存するも身は喪う。狄人元(くび)を歸せば，三軍悽愴たり。尙書は算(はかりごと)多くして，守備是れ長し。雲梯拒ぐべく，地道能く

防ぐ。齊將の壁を閉ざすこと有るも，燕師の牆に臥すこと無し。大事去れり，人ここに亡ぶ。申子奮發して，勇氣咆勃たり。實に元戎を總べ，身づから士卒に先んず。冑は魚門に落ち，兵は馬窟に塡まる。屢ば通中を犯して，頻りに骨を刮らるるに遭う。功業は夭くして枉げられ，身も名も埋沒す。

庾信の集を繙くと，しばしば重複する內容の表現を何箇所かに亙って見かけるが，「五郡則兄弟相悲，三州則父子離別」は「傷心賦」にもほぼそのまま見える句。但しそちらでは次のようにして表れる。

在昔金陵，天下喪亂，王室板蕩，生民塗炭。兄弟則五郡分張，父子則三州離散。

まず北周の今から「在昔」へと時を一氣に溯り，「金陵」という空間を設定。以下「天下」→「王室」→「生民」と句を追ってその視界が絞られていき，そこで最も個別的な局面として五郡兄弟，三州父子が示される。こういう形では，極めて個別的な例でありながら，同時に唯一の代表的な例として一般的な意義も付加される。對してこの「哀江南賦」の二句は，そういうコンテクストで捉えられない。ほぼ全く同じ言葉によりながら，こちらは前後に配する幾つかの事例とともに金陵陷落直前，梁朝諸臣の奮鬪の事蹟の一端を擔なう，そういう部分として組み込まれている。

「護軍」とは韋粲，「濟陽」の兄弟とは江子一・子四・子五の三兄弟，「尙書」は羊侃，「申子」は柳仲禮。それぞれ官名・郡望等によって人物を直截に示している。一方，個々の事蹟について附け加えられる二句一對の評「三世爲將，終於此滅」「主辱臣死，名存身喪」「大事去矣，人之云亡」「功業夭枉，身名埋沒」等は『國語』『詩經』『左傳』『史記』等に本づくもので，何れも〃滅亡〃に結びつくイメージを帶びたものばかりである。このような典故の多用によって自ずと，個々の事蹟がどうこうという臺城攻防の一件にまつわる特殊性よりは，そこに潛在する〃滅亡〃必至の側の情勢として普遍的なイメージのほうが强調されることになる。因みに，ここでの語り手庾信はと言うと，以上の出來事に自身の存在を絡ませるということもなく，專ら事態に深く結び付いた烈士の提示とそれらに對する評論をな

す存在として機能している。

三―(三)

第四段落には，この「哀江南賦」全篇の中で第六段落以外に唯一往時を哀惜し回想するモティーフの明らかな一節を含む。

「是に於て西楚覇王，劍を繁陽に及ぼす（於是西楚覇王，劍及繁陽）」から始まるこの段落では「西楚覇王」項羽に比される元帝蕭繹の代の中興と敗亡とが述べられる。が，その中で元帝の先代簡文帝の辿った命運に觸れる一段があるのである。實際の歴史的な順番としては簡文帝蕭綱のほうが元帝の先代に當る。とは言え，ほとんど名を留めるのみで在位期間らしい期間を持たないこの簡文帝は，「哀江南賦」の時間座標の目盛りからは外れ「西楚覇王」元帝が決起して侯景を平らげ一息ついたところで，金陵に因む武帝代回顧がなされる中での回想對象として述べられるのである。その結果，この一節は「哀江南賦」本文中，時を追って述べ繼いでいく語りの座標軸が一時頓挫し，時間を遡る回想的敍述形式による唯一の部分として注意を引く。

昔之虎踞龍盤，加以黃旗紫氣，莫不隨狐兎而窟穴，與風塵而殄瘁。西瞻博望，北臨玄圃。月樹風臺，池平樹古。倚弓於玉女窗扉，繫馬於鳳凰樓柱。仁壽之鏡徒懸，茂陵之書空聚。若夫立德立言，謨明寅亮。聲超於繫表，道高於河上。更不遇於浮丘，遂無言於師曠。以愛子而託人，知西陵而誰望。非無北闕之兵，猶有雲臺之杖。

昔の虎の踞り龍の盤り，加うるに黃旗紫氣を以てするも，狐兎に隨いて窟穴し，風塵と與に殄瘁せざるは莫し。西のかた博望を瞻て，北のかた玄圃に臨む。月樹風臺，池は平らぎ樹は古びたり。弓を玉女の窗扉に倚け，馬を鳳凰の樓柱に繫く。仁壽の鏡は徒しく懸かり，茂陵の書は空しく聚まる。夫の立德立言，謨明るく寅亮らかなるが若きは，聲は繫表より超え，道は河上より高し。更に浮丘に遇わずして，遂に師曠に言無し。愛子を以て人に託するも，西陵と知りて誰か望まん。北闕の兵無きにはあらざれども，猶お雲臺の杖あるがごとし。

「仁壽之鏡徒懸，茂陵之書空聚」については，北周明帝を

悼む詩「和宇文內史入重陽閣」にもほぼ同樣の表現「徒懸仁壽鏡，空聚茂陵書」が見える。晉洛陽仁壽殿中の巨大な銅鏡，漢武帝が自らの墓陵に斂めさせたという道書數十卷，どちらも生きて用いる主あってこそ價値ある贅澤品であり，嗜好品である。その前二句の「玉女窗扉」「鳳凰樓柱」もともに驕奢の世界に屬する事物。殊に鏡・玉女・窗扉・鳳凰・樓柱いずれも南朝宮體詩の艶麗な世界を彷彿とさせる語彙である。加えて「博望」「玄圃」も，武帝の先の皇太子昭明太子蕭統に因む宮苑の名。王朝が危殆に瀕する前に亡くなった昭明太子に係わる，南朝末期梁朝の艶麗なイメージを帶びる言葉である。そういった名詞群が，ここでは本來置かれるべき華麗繁榮の情景ではなく，むしろ正反對の衰落や荒廢の情景に結びつけられている。「昔」から王者の兆しが幾つも立った江南の地が，今は「狐兎」の跋扈する野に，「玉女窗扉」「鳳凰樓柱」には，雅な宮女の代わりに武具の「弓」「馬」が配され，「仁壽之鏡」も「茂陵之書」もそれを用いるべき主が不在の空虛な狀態を表す。そして簡文帝本人に關する回想にしても，人品・學問を稱するかのような語句を用いながら，結局その行爲を空しいものとして結んでいる。

ここでは，華麗で豐かな常態のイメージを持った事物を，その本來の目的と正反對の空虛や荒廢の狀態を表す言葉に繫聯することによって，眼前の寂寥感を强調する，という六朝期の詩文にはむしろ常套的とも言える手法が認められる。時間の推移に伴う事物の下降というモティーフを踏まえることによって，〝悲哀〟は他の部分に比べてよりはっきりと表れている。

三―(四)

最後に梁朝滅亡後，梁朝遺民が江南から北地へと移される旅途についての敍述を見てみよう。ここには樂府や古詩以來建安詩を通して詩文の主題として定着した流氓・離別にまつわる哀感のモティーフが色濃く出ている。

水毒秦涇，山高趙陘。十里五里，長亭短亭。饑隨蟄燕，暗逐流螢。秦中水黑，關上泥青。於時瓦解冰泮，風飛電散。渾然千里，淄澠一亂。雲暗如沙，冰橫似岸。逢赴洛

之陸機，見離家之王粲。莫不聞隴水而掩泣，向關山而長嘆。

水は秦の涇に毒せられ，山は趙の陘よりも高し。十里五里ごとに，長亭短亭あり。飢えては蟄の燕を隨い，暗には流ぶ螢を逐う。秦中 水は黑く，關上 泥は青し。時に瓦のごとく解かれ冰のごとく泮かれ，風のごとく飛び電のごとく散る。渾然たる千里，淄も澠も一に亂る。雲は暗きこと沙の如く，冰は横たわること岸の似し。洛に赴く陸機に逢い，家を離れし王粲に見ゆ。隴水と聞きて泣を掩わず，關山に向かいて長嘆せざるは莫し。

四言句を基調として，疊みかけるように連ねるこの一節で，「雲」「水」「冰」の「暗」「黑」など，感觸の冷たさを直感させる天象類をはじめ，「隴水」「關山」まで，「苦寒行」「度關山曲」等，征人行役の辛苦をモティーフとした樂府詩に常用される語句が目立つ。しかし，そのように直接には北地の自然環境の嚴しさや險しさを表す效果を持つ語彙であって，更に歷史的な艱難にまつわる典故を踏まえているものも多い。例えば「饑隨蟄燕，暗逐流螢」二句などでも，それぞれ西晉末，後漢末の爭亂下の悲慘を傳える故事が背景にある，というように。

況復君在交河，妾在青波。石望夫而逾遠，山望子而逾多。才人之憶代郡，公主之去清河，栩陽亭有離別之賦，臨江王有愁思之歌。別有飄颻武威，羈旅金城。班超生而望返，溫序死而思歸。李陵之雙鳧永去，蘇武之一雁空飛。

況んや復た君は交河に在り，妾は青波に在り。石に夫を望めば逾よ遠く，山に子を望めば逾よ多し。才人の代郡を憶い，公主の清河を去るや，栩陽亭に離別の賦あり，臨江王に愁思の歌あり。別に武威に飄颻とし，金城に羈旅するもの有り。班超は生きて返らんことを望み，溫序は死するも歸らんことを思う。李陵の雙鳧 永えに去って，蘇武の一雁 空しく飛ぶ。

庾信には，かつて梁元帝らとともに王褒の樂府「燕歌行」に唱和して競作した[24]「燕歌行」があるが，出征兵士を待つ妻の思いの形を取って述べたとは言えそれはいかにも閨怨詩らしい，艶なものである。「哀江南賦」のこの一節に於ける，出征した者或いは出征する者の立場からの生別離苦

を訴えるモティーフと比べると，「燕歌行」に現實の緊張感が缺如していることは言うまでもない。前一節の「赴洛之陸機」「離家之王粲」及びこの節の「班超望返」「溫序思歸」「李陵之雙鳧」「蘇武之一雁」等，羈旅漂泊の境涯で餘りにも有名な古人の名はこの賦の中で他所に見えるものもあるし，「擬詠懷二十七首」など庾信の羈旅感を歌う他作品でも往々用いられてお馴染みの，庾信自身及び庾信同樣の羈留の境遇に在る梁朝遺臣の比擬對象。

この段に至って，やはり「今事」を述べる事柄中心の敍述には變わりないものの，それを表す語句は直接に生別離苦に關わるものが主となって，事柄の悲哀性は（一）（二）（三）のどれよりもはっきりと窺われる。ちょうど梁朝滅亡が決定的になって時代環境も庾信個人に關わる內容も下降していくのと反對に，その內容が帶びる〃悲哀〃性だけが顯著になっていく，という關係になっているのである。

以上「哀江南賦」本文，興亡の過程の具體的な表現について四點ほど擧げてみた。江南での太平謳歌の世に始まり，侯景の亂を境とする爭亂と崩壞の過程，元帝中興期からの金陵回顧，王朝滅亡後羈旅に伴う生別離苦まで，個々のモティーフはどれも一代の興亡に關わるものである點で一致する。が，他方，六朝期を通じて既に詩賦の中で馴染み深いものもあれば，庾信以前の詩賦ではあまり見られないか，或いは前例としては檄文や史論などの文の中に常用されるものもある，というようにそれぞれの來歷は異なり多彩でもある。個別でも國家興亡の諸側面に關わる內容として十分に用を成すようなこれら多彩なモティーフが，この梁朝興亡の時間軸上で，前後の他のモティーフとの係わりの中に改めて配されることによって，一つの完結した〃時間〃世界を形作る。これはまさに人事＝事柄の鋪陳ではないか。しかもその相互の關係は，時間軸の進行に伴って，より深刻な〃悲哀〃性を帶びたモティーフが配されるものとなっている。一言で言うなら，治→亂→亡，と次第に深刻さを加えていくモティーフの配列が，時間とともに下降する一時代の相を表しているのである。これは，下降するから〃悲哀〃が生じる，というよりは，むしろ各モティーフの

〃悲哀〃の強まりが，下降の表現を生む，という仕組みと言えよう。

ここで「哀江南賦」に於ける敍述の在り方をめぐって，是非參考したい意見がある。何焯『義門讀書記』卷四五の一條、潘岳「西征賦」札記の中で「哀江南賦」に言及した部分及び何焯の說を繼承した李詳の發言がそれである。すなわち，何焯言う。

（潘安仁西征賦）刺取史事爲賦，故主於人物。稍以征途所歷山川羅絡其中。筆力遒壯，不累於繁釀。拓宇班氏父子，文辭不妨代興，所學則非矣。子山哀江南賦，體源於此。庾賦今事，故尤有關係能動人，此善變者也。

（潘安仁西征賦は）史事を刺取して賦と爲す，故に人物を主とす。稍く征途歷る所の山川を以て其の中に羅絡するに，筆力遒壯にして，繁釀に累わされず。宇を班氏父子に拓くも，文辭は代も興るを妨げざるは，學ぶ所は則ち非なればなり。子山の哀江南賦は，體は此に源く。庾は今事を賦す，故に尤だ關係して能く人を動かすこと有り，此れ善く變ずる者なり。

そして近人李詳は「哀江南賦集注」[26]序で次のように述べている。

子山哀江南賦，體放西征〔原注；本何義門說〕，近摹郊居。遒文巨製，取精用宏。……

（庾）子山の哀江南賦は，體を西征（賦）に放い〔何義門の說に本づく〕，近くは郊居（賦）に摹う。遒文巨製，取るに精しく用うるに宏し。……

兩氏の發言は直接には，無論大量の歷史故事の典用についての相似を採り上げたものであろう。が，そればかりであろうか。何焯・李詳が「哀江南賦」を繫聯させている潘岳「西征賦」沈約「郊居賦」は，いずれも六朝を代表する大賦。抒情小賦全盛の趨勢の中で，大賦に於ても漢賦からの脫皮を示す獨自のスタイルを形成していったことは周知の通りである。ところで，その展開は，主として辭賦の〃鋪陳〃性から由來する敍事的表現と抒情的內容との融合，という點で辿ることができるもので，かつ「西征賦」などはその好例[27]に當ると，私は考えるのだが，そういう視點に

とって，兩氏の言は，この「哀江南賦」の亡國にまつわる事柄（人事）を時間軸に沿ってする鋪陳も，その展開の中に位置づけ得ることを，提起するものと受け取られるのである。

四

最後に，「哀江南賦」に於ける〝悲哀〟のモティーフとその敍述の在り方を，魏晉南北朝文學の中に還元して考えてみたい。

言うまでもなく，〝悲哀〟は，人が生きていく中できっと心に體驗する感情の一つである。個人の思惟・感情の表出としての〝自敍〟の文學に見られる情感の中でもこの〝悲哀〟は代表的なものである。何がしかの折に觸れての悲哀や苦痛の表明，それには例えば生別離苦にまつわる個人の具體的な實感に根ざしたものから，人生一般に對するやや抽象的なものまで，實に多樣な內容（場合）が存在する。魏の建安以來，六朝の詩文の中でそうした〝悲哀〟の表現が，その內容に於てもまた手法に於てもめざましく成熟を遂げたことは誰しも異論のないところであろう。この時代の〝自敍〟文學の流れを特に〝悲哀〟の表現の展開によって迹づけることとて決して無理ではない。ところでその〝悲哀〟を表現する場或いは背景（situation）として「國家破亡」は誰もが容易に聯想し得る情況の一つであり，しかもこの國家破亡の下での悲哀を詩文に詠ずる營みの歷史は古くかつ長い。例えば「麥秀」歌「黍離」詩。これらは長らく亡國を悲しむ歌として傳えられ，その篇名が亡國の代名詞にさえなっている。下って南宋末，明末清初，そして清末に至るまで，中國文學の歷史を辿ってみれば，大は王朝交替，小は內紛政爭の混亂を經るたびに，そういった時世に伴う人々の不安や怒り，恨み，悲しみを綴った詩文が實に多量に綿々と表されてきた。大雜把な括り方をすれば，一種の〝燒け跡文學〟[2]〝亡國文學〟の系譜ということもできる。

さて，魏晉南北朝期。後漢も合わせて約六百年の間に八代の王朝が入れ替わり，しかも各朝代の間にも政權爭奪が常習的に重ねられたこの時代は，まさに燒け跡に佇まぬこ

とのほうが難しいような，つまり〃悲哀〃を謳う場には事欠かぬ時代であった。實際，後漢末の爭亂による荒廢を詠じた王粲「登樓賦」「七哀詩」，廣陵の荒蕪のさまを詠じた鮑照「蕪城賦」，吳の亡國にまつわる悲痛を籠めた陸機の「赴洛道中」等五言詩，など爭亂のもたらす社會の荒廢と個人の不安をモティーフとした詩賦は少なくない。そしてこの時代最後の大きな動亂とも言える梁朝滅亡を背景として著されたのが「哀江南賦」と，概觀すればざっとこう要約し得るものの，實はそう簡單なわけにはいかない。すなわち，本論でずっと確かめてきたような「哀江南賦」の在り方を通して，これに先立つ魏晉南北朝期に於ける展開を顧みると，興味深い重なりと相違が見えてくるのである。

例えば，同じく辭賦の形で，戰亂の荒蕪を詠じたものとして名高い鮑照「蕪城賦」。

王室內部の抗爭絕えない宋朝という時代環境下で實際に戰亂を經た鮑照が「廣陵の故城」（『文選』卷十一題下李善注引『鮑照集』）の荒蕪を歌ったものとして知られるこの賦は作品を取り卷く情況からすると「哀江南賦」と共通するところも多い。が，手法上の對照のほうが，むしろ目を引く。第一に，戰亂を經た後の廢墟に語り手が立ってその荒蕪の空間を眼前にしながら詠う，という體裁であることに於て。第二に，廣陵という一つの空間をめぐって興亡の事實が肝腎の滅亡に到る過程には露ほども觸れずに，單に「今の荒蕪」と「昔の繁榮」という兩極の價値の對比から提示される點に於て。それはちょうど暗轉を挾んで舞臺背景がガラリと一變してしまうような運びなのである。

例えばその冒頭は，

瀰迤たる平原は，南のかた蒼梧・漲海に馳せ，北のかた紫塞・雁門に走る。柁とるに漕渠を以てし，軸するに崑岡を以てす。重江複關の隩，四會五達の莊あり（瀰迤平原，南馳蒼梧漲海，北走紫塞雁門。柁以漕渠，軸以崑岡。重江複關之隩，四會五達之莊）

とあって，廢墟に立って「南は……北は……」とまず語り手を取り卷く空間についてその封域の設定から說き起こす。この空間がどれほどに廣くどのような地勢か，それをまず前提する。これが，後に續く戰亂にまつわる感慨の表明の

場ともなる。次いで「當昔全盛之時」以下，戰亂前往時の繁華と充實のさまの陳述。それを「觀基扃之固護，將萬祀而一君，出入三代，五百餘載」と最大限に盛り上げたところで，一轉「竟瓜剖而豆分」という僅か一句を挾んでもう「澤葵依井，荒葛罥塗。……」と，有名な荒蕪の描寫に移る。このように，まるで廣陵の荒蕪が一時に出來したような錯覺さえ誘う，古と今の對比の構圖は，明らかに「哀江南賦」が繁榮から滅亡に至る過程を多くの言葉を費やして敍述したのとは，手法を異にするものである。

一體に，「蕪城賦」に限らず，庾信以前の魏晉南北朝期の詩賦に於ては，興亡にまつわる悲哀等の感慨を述べる語り手の場は，廢墟そのものであった。すなわち，「哀江南賦」に先立つ時代の五言詩・辭賦に於て，國家破亡の〝悲哀〟のモティーフは，亡朝の遺臣が廢墟に佇みその場の光景に悲歌慷慨するスタイルをとるのが最も一般的であった。例えば溯って『詩經』王風「黍離」を亡國羈旅歌として位置づける毛序では次のように說く。

黍離は，宗周を閔れむなり。周の大夫行役して，宗周に至り，故の宗廟宮室の盡く禾黍と爲るに過る。周室の顚覆を閔れみ，彷徨して去るに忍びずして是の詩を作る（黍離閔宗周也。周大夫行役，至于宗周，過故宗廟宮室盡爲禾黍。閔周室之顚覆，彷徨不忍去而作是詩也）

それは，同じ空間について在りし日の記憶を對比して示すことによって眼前の廢墟に對する悲哀を强調する手法をしばしば伴うが，ともかく〝悲哀〟の場は眼前の空間に在る。

後漢末の擾亂に伴う社會の荒廢を背景とし，故郷を離れた羈旅の身の上で作られた王粲「登樓賦」もやはり，眼前の空間を語りの場としつつ或いは望郷の思いを述べ，或いは世の混亂を憂え，という詩人の心中の表現を展開する一篇として名高い。その亂世を背景にした羈旅・不得志，といった個人の苦痛を象徵するのが所謂蕭條の原野の表現であるのに端的に窮われる通り，これも心情の表現の場として空間が重要なのであった。すなわち，「登茲樓以四望，聊暇日以銷憂望」樓に登って四方の空間を見渡す，という冒頭以下「挾淸漳之通浦兮，倚曲沮之長洲。背墳衍之廣陸

兮，臨皋隰之沃流。北彌陶牧，西接昭丘，華實蔽野，黍稷盈疇」と，自己を中心とする空間をなぞって，その後の心情を語る場を設定している。王粲はその空間を「とてもよい所だけれど，でも私の心に適う場所じゃない，腰を据えることはできない（雖信美而非吾土兮，曾何足以少留）」と評して，この意に適わぬ環境に甘んじねばならない原因である世の亂れへの嘆きや望郷の思いを述べていくわけだが，ともかく意に適わぬはずのその空間を寫して敍述の場としていることに變わりはない。

このような表現の場としての空間と，自己が身を置く環境への否定・不滿を强調する裝置としての往時回顧，古今對比の構造が，長く典型的な亡國の悲哀のモティーフであったように見える。

これに對して「哀江南賦」の場合は，語り手が自己を取り卷く環境について意を得ざる狀態にあり，それを述べるという情況は，從前の詩賦のそれと重なるにも拘わらず，哀惜の對象である江南の空間を甦らせるとか，或いは北周の地で語る自己を取り卷く現環境を描寫するといった，空間的な設定をしていない。空間を悲哀の場とする代わりに，北周當時とは不連續の既に閉じられた江南期の時間軸に從って，北周の「今」にまで通じる悲哀を生じる過程——興亡の過程——そのものをうたったもの。これは〃悲哀〃の生成に係わる一部の時間だけを流れから切り取って特別な意味を帶びさせた，一種の〃時間〃の再現とも言える。その再現された〃時間〃は「今」の〃悲哀〃を導き出す原因でもあるが，只だ結果として悲哀を生むばかりでなく，同時に，それ自體，再現に關わる個々のモティーフが帶びる〃悲哀〃性の連鎖によって，既に〃悲哀〃の內實を持つものとなっていることは本論で見てきた通り。「悲哀の時間」の表現，である。

結び

江南という空間への復歸も許されず，ましてや時間が不可逆性のものである以上は梁朝の時代に立ち戻ることなど不可能，そういう實際的條件が詩の內容を左右することは

往々あっても，詩の型については必ずしも決定要因になるとは限らない。現に庾信の北遷後作品のうちにも，羈旅感は多様な表れ方をしている。その中で，また古今多數の〃戰亂歌〃の中で「哀江南賦」の佳篇たる所以は，「哀江南賦」が，自身を取り卷く環境の背景に當る事柄を，單なる歌の背景に濟まさず，それそのものを徹底的に歌って示すものであることに在るだろう。それは，羈旅の身の自己にとって意を得ざる眼前の時空間を徹底的に外し去って，言わば時間空間兩面で回復不可能な哀惜の對象の世界のみを〃言葉〃の力でもって再現するという形をとった。㉔そのため，この一篇のうちには，梁朝末のその時までに蓄積された種々の〃興亡の悲哀〃のモティーフが凝集して，梁一代の時間軸に沿って再構成された重層的世界さえもが見出せるのである。これはやはり，鋪陳文學の展開の上で，その新たな可能性を示した一篇に數えるべき作品と言えよう。

註

① 庾信についての專著に，興膳宏『庾信』（一九八三年，集英社）がある。また William T. Graham 氏による「哀江南賦」の英譯 "*The Lament for the South*" (Cambridge Univ. Press, 1980) の卷頭卷末にも，庾信の人と文學についての詳論があり，大陸出版の專著としては鍾優民『望鄉詩人庾信』（一九八八年，吉林大學出版社）がある。

② 程章灿『魏晉南北朝賦史』（一九九二年，江蘇古籍出版社）第八章第三節「入北南人賦作」。曹道衡・沈玉成編『南北朝文學史』（一九九一年，人民文學出版社）第二十二章等，參照。

③ 高光復『賦史述略』（一九八七年，東北師範大學出版社）第七章「他用敘事大賦那種鋪張的手法去展示廣闊的社會圖景，而同時又賦予這些作品以强烈的抒情性」一六一頁。馬積高『賦史』（一九八七年，上海古籍出版社）第六章六「庾信（513－581）南北朝賦的集大成者，……」兩者とも辭賦に限った說であるが，他に例えば，四庫館臣は「庾開府集箋註」提要に於て庾信の北遷を境にした作風の相違について觸れるとともに，「其駢偶之文，則集六朝之大成，而導四傑之先路，自古迄今，屹然四六之宗匠」と評した。これは駢文に絞っての評であるが，實際駢文に限らず文學史の上で庾信の詩文は「六朝之大成」「四傑之先路」として位置づけ得るような存在であることを，具體的に明らかにすることは十分な價値があると思う。

④ 杜甫の「詠懷古迹五首」其一で稱揚されて以後，庾信北遷後の詩文全般が廣く受容されてきているのはもちろんだが，「哀江南賦」一つを殊更にめぐる動きも目立つ。例えば，明代『漢魏六朝百名家集』を編輯した張溥が『庾開府集』題辭

開府集』題辭で「南冠西河，旅人發嘆，鄉關之思，僅寄于哀江南一賦」と述べて，「哀江南賦」をその代表作のように扱ったのをはじめ，清に入って徐樹穀・徐樹炯兄弟は，王滑・王洄・歸莊・吳兆宜・陸繁弨五家の「哀江南賦」注釋を纂めて「哀江南賦註」を編み，近人李詳も未完ながら「哀江南賦集註」を試みており（註㉕書），また王闓運は，清末の動亂の下で，擬作「哀江南賦」をのこす。最近では陳寅恪・饒宗頤兩氏（註⑳㉑參照）他の論考，自傳的性格を專論したものに土屋昌明「自傳としての庾信「哀江南賦」」（『國學院中國學報』三八號）があり，參考させていただいた。

⑤ 姜書閣『駢文史論』第十二章七「庾信及其駢文」（一九八六年，人民文學出版社）を參照。

⑥ 本論第四章に詳述。

⑦ 吉川幸次郎「推移の悲哀——古詩十九首の主題——」（全集卷六，二六六—三三〇頁）

⑧ 庾信の作品については許逸民校點『庾子山集注』（一九八〇年，上海古籍出版社）を底本として使用。

⑨ 『隋書』經籍志二「古史」に「何之元梁典三十卷」の著錄が見える。その「序」は『陳書』本傳に錄される。

⑩ 「梁有天下，自中大同以前，區寓寧晏，太清以後，寇盜交侵，首尾而言，未爲盡美，故迫此一書，分爲六意」という方針の下に各段の要點を次のように述べている。

以高祖創基，因乎齊末，尋宗討本，起自永元，今以前如干卷爲追述。高祖生自布衣，長於弊俗，知風敎之臧否，識民黎之情僞。爰逮君臨，弘斯政術，四紀之內，寔云殷阜。今以如干卷爲太平。世不常夷，時無恆治，非自我後，仍屬橫流，今以如干卷爲敍亂。洎高祖晏駕之年，太宗幽辱之歲，謳歌獄訟，向西陝不向東都。不庭之民，流逸之士，征伐禮樂，歸世祖不歸太宗。撥亂反正，厥庸斯在，治定功成，其勳有屬。今以如干卷爲世祖。至於四海困窮，五德升替，則敬皇紹立，仍以禪陳。今以如干卷爲敬帝。驃騎王琳，崇立後嗣，雖不達天命，然是其忠節。今以如干卷爲後嗣主。

⑪ 本論第三章に引く陳寅恪氏の說を參照。

⑫ 昭明太子『文選』序「事出於沈思，義歸乎翰藻」

⑬ 本論に於ては〃自敍〃を，必ずしも「自己について語る」という範圍に限定せず，個人の思惟や感情の表出という廣義の意味で捉えている。第四章を參照。

⑭ 高橋和己「陸機の傳記とその文學」（『中國文學報』第十一・十二册，一九五九・一九六〇年。のち『高橋和己全集』第十五卷所收）には「辨亡論」製作の動機について「……この分裂した二つの要素，國家興亡に關する政治的見解と，父祖の功業の稱揚との結びつきかたに注意する必要がある」と言い，また「（「辨亡論」は）名分論的正當化にはあまり熱意のない「もっぱら，輔佐の臣，とりわけ祖父や父の戰勝の記錄を中軸として動いてゆく」ものであることを論じている。また興膳宏『潘岳・陸機』（一九七三年，筑摩書房）には「「辨亡論」

には，冷徹な歴史評論のスタイルを裝いながら，實はきわめて熱っぽい調子で亡國の怨みが語られている。上下二篇のこの論文のねらいは，吳の興亡の原因を分析し，祖父と父の功業を稱揚することにあった」（一四〇頁）とある。

⑮ 庾信については前掲①鍾氏書名がその最も顯著な例と言えよう。陸機については前掲⑭書など參照。

⑯ 前掲⑭高橋氏論文に見える。

⑰ そこに用いられる語句は，大體現存史書の記述（例えば「過秦論」なら『史記』『漢書』等，「辨亡論」なら『三國志』『後漢書』等，無論正史以外の史書もこの中に入る）と合致するものが大半であるが，必ずしも執筆の際に一々それに本づいたとは考え難い。この興亡史論の構造についても，大變興味深いものがあるが，本論ではまだ推論に止まる。

⑱ 本論では「鋪陳」を，辭賦の修辭・內容兩面に關わる性質を指す言葉として用いている。詳細な定義については，劉勰『文心雕龍』詮賦篇「賦者，鋪也。鋪采摛文，體物寫志也」及び中島千秋『賦の成立と展開』（一九六三年）第一章「歌い方としての賦」を參照。

⑲ 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』第二章「玄儒文史」（一九八六年，同朋舍）を參照。

⑳ 『文轍』（上）（一九九一年，臺灣，學生書局）所收。

㉑ 『金明館叢稿初編』（一九八〇年，上海古籍出版社）所收（原載一九三九年昆明清華學報）。

㉒ 他に，近人瞿蛻園『漢魏六朝賦選』（一九六四年，上海古籍出版社），譚正璧・紀馥華『庾信詩賦選』（一九五八年，上海古典文學出版社）も存在するが，やはり詳細な考證という點で倪注を凌駕するまでには至っていない。

㉓ 『漢武帝內傳』「帝崩，三月，葬於茂陵。又帝崩時，遺詔以雜書三十餘卷，常讀玩之，使隨身斂」

㉔ 「燕歌行」題下倪注は『周書』王褒傳の記事「褒曾作燕歌行，妙盡關塞苦寒之狀，元帝及諸文士並和之，而競爲悽切之詞」を引いて「故（庾）信亦有此歌矣」と說く。

㉕ 『李審言文集』（一九八九年，江蘇古籍出版社）所收。

㉖ 程章灿前掲②書第四章「兩晉賦」，及び高光復・馬積高前掲③書を參照。また潘岳「西征賦」については拙論「潘岳「西征賦」攷」（『中國文學報』第四四册）に於て些か論じている。

㉗ 鈴木虎雄『中國戰亂詩』（一九六八年，筑摩書房。もと『禹域戰亂詩解』一九四五年）は『詩經』大明から淸末黃遵憲「降將軍詩歌」まで歷代の「戰亂詩」を收める。その序に「太平の時は常に稀にして戰亂の世は常に多し。……他國にも戰亂多し，而して果して中國の如く各時代にわたりてこれを敍出せる詩人ありや否や」との一節が見える。この序文及び卷末の小川環樹「解說」の通論を參照。

㉘ 「哀江南賦」をめぐる諸問題の一つにその制作時期の推定がある。從來の陳寅恪氏の考證（前掲㉑書）を代表とする庾信晩年期に制作されたと見る說に對して，北遷後間もない頃

（五五〇年代後半）に繰り上げる説が幾つか提出されている（加藤國安「梁朝社會下の庾信」〔『愛媛大學教育學部紀要』第Ⅰ―十九卷，一九八七年〕以下，同氏によって詳論されている）。作品を檢討する上でそれがいつ成立したかということは，特にこの「哀江南賦」のように自傳的傾向を帶びるものの場合には，無論無視しては通れない問題である。本論ではその制作時期について敢えて深く拘わらずにきたが，以上のように眼前の時空間を徹底的に排除し去って，遠く隔たった過去の時空間を再現するこの賦の構造を確認してみると，この賦の帶びる〝悲哀〟の痛切さとは，再現の對象（江南）からの時空雙方の距離・庾信が無視した在北期間の長さにおそらく比例するものではないか，という感觸が得られたことを，附記しておく。